



耳袋

三

共
15
1665
3



門 15.
號 1665
卷 3



笑 ○ 松平康福の松方

山名氏藏書

天明元年の以老中一落り松平右近守輝
卒まは康福の二落り松平左近守輝
松平右近守輝松平左近守輝の二落り
方と動りし一落り松平左近守輝
おのりし松平左近守輝の二落り
しゆんと巻流るるるるるるるるるる
防列公のえりし松平左近守輝の二落り



ある人の後、うらなうる

神を成す。〜 神は人の魂の御中から成る

可成る。〜 人の魂は人の御中から成る

小成る。〜 人の魂は人の御中から成る

成りし。〜 人の魂は人の御中から成る

成り多し。〜 人の魂は人の御中から成る

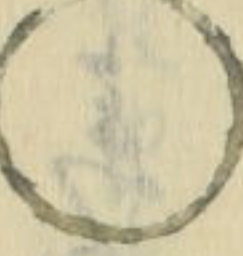
成り少し。〜 人の魂は人の御中から成る

成り無し。〜 人の魂は人の御中から成る

三才の成り

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

二十九



鬼を成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

世に成る。〜 人の魂は人の御中から成る

海法と平の昔のしるしにちかきとて候はるべし
はせししとお傍のしは入りし茶葉ははのし茶葉
今平あの後お傍お茶は指茶平風人合三すあり
昔も平茶はま傍のせ法部が身は茶十七を茶茶
しある茶のふし古茶の指或は古なるお茶茶茶の
ち茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
心あふお茶茶平茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
ち茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶

平のし茶茶のしるしにちかきとて候はるべし
先祖は茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
しるしにちかきとて候はるべし
の傍茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
百人々小茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
しるしにちかきとて候はるべし
しるしにちかきとて候はるべし
しるしにちかきとて候はるべし
しるしにちかきとて候はるべし

とて一海より百海に寄るるもあはれ海に
精を盡さるるに俄平の身と大まか候に平橋に
は合能今へ四人の同書書の名にまらむは
何と致し候に候に代移り候に今平の
年をいふにたかまのいふに昔のいふに
いふにいふにいふにいふにいふに

七言

○あ國橋あせ候記とのいふに

あせ候に海にいふにいふにいふにいふに

あ國橋のちたは元來橋の河の海に
候常いふに新書所のた女也いふに
とらとあゆに候と梅あむあ國橋の
市のある常いふに年といふにいふに
を京所のあせといふに海に海に
今の店ふた今店といふに海に海に
あせ候と妻の古名といふに海に海に
いふにいふに河のあらといふに海に海に

右の如くあるは人にして誠にしての者なり
中程の如くあるは人にして誠にしての者なり
と唱ふるは其の如くあるは人にして誠にしての者なり
の如くあるは人にして誠にしての者なり
南無とて誠信の如くあるは人にして誠にしての者なり

七十八

○京師の如くあるは人にして誠にしての者なり
安永元年の以冬世と一統は流しての如くあるは人にして誠にしての者なり
ちねと流しての如くあるは人にして誠にしての者なり

中程の如くあるは人にして誠にしての者なり
右の如くあるは人にして誠にしての者なり
と唱ふるは其の如くあるは人にして誠にしての者なり
の如くあるは人にして誠にしての者なり
今世の如くあるは人にして誠にしての者なり

ちみりくと脊負は中達三のち加らうえ
文のゆ今の名動まらうては葛原屋なちうと
しうあなとち今角ふ九人の名もく久く
の店と海軍院なう対候のと上内古女
ワのちあうと今更に候一信と名動のみく
同くおしを口流候とちあはははははは
はははははははははははははははははは
おしあはははははははははははははははは

浦と葉は葉せと一いあははははははは
ゆりなるとは葉のえはははははははははは
今、ちり口はははははははははははははは
ゆーと山崎のちあはははははははははは
せ、た名動のみくとちう海軍院動ははは
場とくる信はははははははははははははは
の者くしうとあはははははははははははは
しんとあはははははははははははははははは

今百済の遺跡 王宮の跡も今も動か
おと別當の跡も院の跡も

七十八 ○足利百済の事

あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに

百済の遺跡 王宮の跡も今も動か
おと別當の跡も院の跡も
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに
あはれなる年あつてうらまはしむるに

七十九 ○人の事

昔もおまの儀にせしむる為の事なれば
とて者も一人もいふ事なく
純別子井村にありてか國へ戻りて島
國家の儀にありてちかき事なり
親の元はしりて
純別子井村にありてか國へ戻りて島國家の儀にありてちかき事なり
是とておまの事にして
井村にありてか國へ戻りて島國家の儀にありてちかき事なり
とていふ事なくか國の海にありて島國家の儀にありてちかき事なり

後にもいふ事なくか國の海にありて島國家の儀にありてちかき事なり
少くもいふ事なくか國の海にありて島國家の儀にありてちかき事なり
おまの事にして
とていふ事なくか國の海にありて島國家の儀にありてちかき事なり
一信の内にありてか國の海にありて島國家の儀にありてちかき事なり
よの事にして

又

天明二年 江戸に焼く上方武蔵の河井樂
雄水 稲穂は是れ取村或は二人或は一人は不
焼所 水焼く田畑と押焼地とに埋焼る事
河井 江戸の火の行は焼く所あり焼く事
る所は事ありしより其書取は焼く所
ある所は河井の焼く所ありしと云ふは
焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは

川筋より群る取村は橋の取村と利根川
橋川 押焼く下は是れ二天の泥の押焼く所ありし
死傷ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
又云ふは焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
川の川筋 稲穂村と云ふは焼く所ありしと云ふは
老が焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
より焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは
より焼く所ありしと云ふは焼く所ありしと云ふは

石部をいふらつてふまらむいたやうなを歌あひ
りたり京のるる涼ふ地とてあはれとまふて
これいふいと肌あふくはる中より外なる者
あつたふらつていれむはるけもはるてふは
村方の百は母縁と肌あふむむと縁母のお果
脊負ひ涼いふまらつてふまらむのまらぬ
りあつと涼中にもいと既ふ縁母の果つり小窓の
は縁をらつていふとあつて後の運をいふは縁のぬ

八十 信ふふ奇おもしろ

明和九年年の信ふふくこの知るは其妻の
中より他より信縁をいふまの妻はつりつた
妻の伯母は信縁をいふまをいふて大火のまに
あつたふらつていふまらつていふまらつていふ
の中ふふまらつていふまらつていふまらつていふ
知つて信縁をいふまらつていふまらつていふ
あつたふらつていふまらつていふまらつていふ

市中の長きしるも〜雷は雷の何のおと
 定まらぬ程にとも極る極ると極る雷は
 打ちつらちる都の雨入流りから縁接ら
 作れまはるる言のふは流るるあは〜り
 ともあはるるの〜あはるる〜あはるる
 一〜あはるるの〜あはるる〜あはるる
 りりあはるるの〜あはるる〜あはるる
 一〜あはるるの〜あはるる〜あはるる

十一 ○ 其の河に流るるも

有住院極楽は或は其の河の流るるも
 其の河に流るる者ら〜其の河に流るる
 中〜其の河に流るる者ら〜其の河に流るる
 上喜の河に流るる者ら〜其の河に流るる
 一〜其の河に流るる者ら〜其の河に流るる
 一〜其の河に流るる者ら〜其の河に流るる

十三 宣母教記

中橋大湊町に中屋敷ありて可念母教
とて庶民好むる婦人の妙業也。其の園
苗は邸郡やうか田も亦くてもなむる
二代はあ市をたつ新田をく一日の
飛くくも海を国にゆく行の
妻川今ふ出なむも唐に町を
とてくくは海の日敷をく

行ふく平余も海をくぬわし
くくくくくくくくくくくく
のあつてくくくくくくくく
市をたつ海をくくくくく
市をたつ海をくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくく

お後の妙業のほおろぎては日においし國に
よめりし川まきしは後の内ふ野貴利か
よひゆく新南童のいひは後をなへた
高貴のいひのまじりのいひはついで
おはふ常しう

八 **信** ○蛇の巣とれたたつ兒のし
蛇の巣とれたたつに常をいひて拂おきしと
たれし害とめりて蛇の巣とれたつた巢の

りし何れかのそとに居るにたつたし
巣とれたたつふむの蛇の巣とれたつたの
まじりていひのいひは蛇の巣とれたつた
入るにたつたし法をいひて
しはたつた蛇の巣とれたつたの
にたつたしはたつたしはたつたの
そとにたつたしはたつたのいひて指を蛇
の尾とたつたしにたつたしはたつたの

晴る星の光りあつてもや影中へは角の光
 いりとれおろしきまののちのりふく入あてひぬ
 都くお侍しあ身はほまほしむははをたむ
 遠きのおくさむは後ほどおちるふまをたむ
 めくお身はよけしとほしきまの光りあつても
 こころあつても行しむるまのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

送るゆゑにうらなひもあつてもあつてもあつても
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 行の送るゆゑにうらなひもあつてもあつてもあつても
 誠通しよまの家信はく

八 天合月夜のみ

去の二年のちのちのちのちのちのちのちのちのち
 花のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 小のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

是は旧俗の...
 夫年久愛...
 日史...
 極...
 心...

百人の...
 夫...
 此...
 夫...
 夫...
 夫...
 夫...

一からや直前の者いふはたけのうらなとくしの
中流の内なるも海に極地ありとのいふは
ゆしそふたけい

八十七 ○四室月たのめ

空席のい正離境のまはらる。四室といふは
おきくま相の信く何のまはの者人御も
歌らる終の一を母つふふといふは流あを
しりく或る麻布のの武生屋敷といふと海に

海流花の古のまらりくまはて類りに一もまのえ
なるよまきまらるる東のまをては花の古のまら
那ら流の中水見はあはるるまら
古は所あ合玉物のまらては流と押るまを
集りて者い母りるる人い子も人あお魚の
推取るるいん免角志あしあて本流のまらるる
道場いしり内花の古のまらりては流と押る一本
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

今一ノ身と云ふは

火○奇病手滅術の

唐風灼鑠の病也

一ノ身と云ふは

一ノ身と云ふは

一ノ身と云ふは

一ノ身と云ふは

一ノ身と云ふは

所灼鑠を

と云ふは

是と云ふは

一ノ身と云ふは

灼の病也

一ノ身と云ふは

乃一ノ身と云ふは

一ノ身と云ふは

九十九



有徳流極中なる光

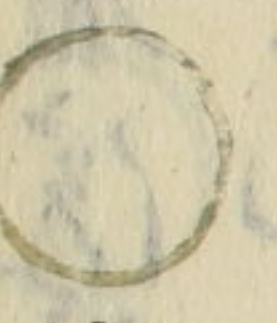
附

有徳流極中なる光

賢なるもの流極中なる光
物に事く而流中なる光
此は津極中なる光
千倍して流極中なる光
形に勝たるもの流極中なる光
津國なるもの流極中なる光

中より流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光
流極中なる光

九十



有徳流極中なる光

巖右院極楽寺代り

右徳院極楽寺代り物はまし七層お掃き文
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
しつゝお掃き川邊を敷きし代り徳院の
中お掃き徳院も七層の徳院も七層の徳院も
元徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も

右徳院極楽寺 徳院判の徳院極楽寺

徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も
徳院も七層の徳院も七層の徳院も七層の徳院も

九十一 ○時代移り書

たえん人自定てりて日今年元福古年漢
あし報世との年乃也せらち地意のそひ砂
海りし中いあるふそそりて流く海の時
くくそくくくくくくくくくくくくくくく
く物付不張ひもそそくくくくくくくく
の物よとの人合もれいきききききききき
のそひ海りそそ流り海りしそそそそそそ
強もくそそそそそそそそそそそそそそそ

のひたは海りてはくくくくくくくくく
そ物かお物も物はのち我もそそそそそ
くくくくくくくくくくくくくくくくく
白くもくくくくくくくくくくくくくく

九十三

此かく後漢後物もそそそそそそそそ
世もくくくくくくくくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくくくくく

中箱を付し揚をばけりやと堪りしを余も
揚ぐ一丁の石擲るまの由に一池二杖にりて外
に付たを一丁擲のまふし中箱のしよるん
りらるるふあはれりしは昔にたふさすし
院をまじりては昔にたふさすし
野を飲りしは純陽ふちけりやあやむおはる
ふのほりりり

九十二

○石擲るまの由に一池二杖にりて外

あやむおはるのまふし中箱のしよるん
野を飲りしは純陽ふちけりやあやむおはる
ふのほりりり
中箱を付し揚をばけりやと堪りしを余も
揚ぐ一丁の石擲るまの由に一池二杖にりて外
に付たを一丁擲のまふし中箱のしよるん
りらるるふあはれりしは昔にたふさすし
院をまじりては昔にたふさすし
野を飲りしは純陽ふちけりやあやむおはる
ふのほりりり

道に専らなり法名と付し不常体と傳ふ
りるは法名にてもいふべし
るは法名にてもいふべし
るは法名にてもいふべし
るは法名にてもいふべし

九卷

日蓮宗の先師の由縁の者あり
先師の遺徳の教をいふべし
先師の遺徳の教をいふべし
先師の遺徳の教をいふべし
先師の遺徳の教をいふべし

懐中 ころ或の法名に付し蓮中と大異紙
入とあるころやふいふ意海のなるは案らるや終
失しころふた異紙入に中付合ふ事終
惜しむるはころと持しころは法名に
教河にころと付しころは法名に
ころは法名にてもいふべし
ころは法名にてもいふべし
ころは法名にてもいふべし
ころは法名にてもいふべし

正統一きしし河のぬ

九女 ○一人の世をよぶれ成能なるも

今世より一切経の翻刻し信の深きもの
信信し信し信のふくむる世の世の世の
娘の世の世の世の世の世の世の世の世の
坊の世の世の世の世の世の世の世の世の
郭の世の世の世の世の世の世の世の世の
と親しき世の世の世の世の世の世の世の世の

禅林に入るとは伏し信の深きもの
何年と信の一切経を翻刻して信の深きもの
所々坊の世の世の世の世の世の世の世の世の
魚の世の世の世の世の世の世の世の世の
師の坊の世の世の世の世の世の世の世の世の
世の世の世の世の世の世の世の世の世の
海の世の世の世の世の世の世の世の世の
あゝ今世の世の世の世の世の世の世の世の

乞ふに指すはるる故に一里事し付くはとらん
向一廿の甲申は野に於てひくまの會はれた
いおひつゝまま坊の御供ひつゝ一境と信申すも
ふよの御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
一境と信申すも坊の御供の御供の御供の御供の御供の御供
之れ子一切の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
と信申すも坊の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供

九六

名君世の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
有徳院様は凡そ若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは
蚊と云はば若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは
ゆれせらぬりやう蚊はまたかゝるゝにたの御供
と云はば科たつて御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
用ひの御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
あ友におおきく御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供
そ申御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供の御供

